

令和 6 年 5 月 27 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K03337

研究課題名(和文) 保育者のワーク・エンゲイジメントを支援するポジティブ認知行動療法プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of positive cognitive behavioral therapy program to support work engagement of nursery school teachers

研究代表者

荒木 友希子 (Araki, Yukiko)

金沢大学・人文学系・教授

研究者番号：30334741

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：保育者が仕事に対して熱意を持っていきいきと働くには保育現場の問題にどのように対処すればよいのか、調査によって分析した。その結果、子ども理解の困難さや給与待遇への不満を感じている保育者はワーク・エンゲイジメントが低かった。特に、保育者が子ども理解に困難を感じる場合、個人でどのような対処をしても役に立たなかったことが示唆された。保育者個人だけではなく、組織としての対応が必要であることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子ども理解に関するストレスにうまく対応できれば、保育者はワーク・エンゲイジメントをさらに向上させる可能性が示唆された。保育者はメンタルヘルスの不調を抱える傾向が強いことが指摘されているが、本研究の結果から保育者のワーク・エンゲイジメントは一般的な労働者よりも高いことが示され、メンタルヘルス不調の傾向は認められなかった。精神疾患に関連するメンタルヘルス対策だけではなく、いきいきと働くことを促進させるポジティブ・メンタルヘルス対策が保育者に有用である。また、非正規は正規職員と比べワーク・エンゲイジメントはより高かったことも示された。保育者の雇用形態の違いについても今後検討すべきであろう。

研究成果の概要(英文)：This study examines how nursery school teachers should cope with the work-related problems in order to be motivated to work. The results suggest that in teachers who have difficulty in understanding of children's behaviors, any coping strategies that each teacher use may not work effectively. We should intervene the whole of the nursery school as well as individual teachers to increase the work engagement which teachers indicate.

研究分野：健康心理学

キーワード：ワーク・エンゲイジメント 保育者 子ども理解 ポジティブ・メンタルヘルス 雇用形態

1. 研究開始当初の背景

職場におけるメンタルヘルス対策として、職員が心身共に健康でいきいきと働くことをめざすワーク・エンゲイジメントという新しい概念が近年注目を集めている。ワーク・エンゲイジメントとは、疲弊し仕事への熱意が低下した燃え尽き(バーンアウト)の対概念として提唱されたものであり、仕事にやりがいを感じ、熱心に取り組み、仕事から活力を得ていきいきとしている状態を意味する(Schaufeliら,2002)。これまでの実証研究から、ワーク・エンゲイジメントの規定要因としては仕事の資源と個人の資質が、また、アウトカム(結果要因)としては心の健康、仕事への肯定的な態度、および、仕事のパフォーマンスといった要因が明らかとなっている(島津,2010)。ワーク・エンゲイジメントは労働者のメンタルヘルスと組織の生産性の双方に寄与する重要な概念として、世界的に科学的検証が進んでいる。

我が国では近年、教員や看護師といった対人援助職の離職が大きな問題となっている。特に保育の現場では、多くの先進諸国では保育者は長く働き続けて専門職化していくのに対し、日本では待機児童対策などで数多くの保育施設が生まれ、保育者の雇用形態や業務内容も多様化していることから、保育者の早期離職率が非常に高くなっている(秋田,2017)。鈴木・小杉(2005)によってワーク・エンゲイジメントの概念が日本に紹介されて以来、企業の労働者や看護師、保健師を対象とした研究が増え始めている。しかし、保育者を対象にワーク・エンゲイジメントを検討した実証研究はこれまで行われていない。

2. 研究の目的

子どもたちの心と体を健やかに育む役割を担う保育者が心身共に健康でいきいきと働くことは、社会全体にとって非常に重要である。なぜなら、保育者のワーク・エンゲイジメントの向上は、子どもたちが受ける保育の質を高め、これからの社会を担う子どもたちの生きる力を大きく育成することに直結するからである。よって、本研究課題の核心をなす学術的「問い」として、「心理学の観点からどのように保育者の心の健康を支援できるのか」といった問題を設定し、ポジティブ認知行動療法の考えに基づいてこの問題に取り組むため、以下の2点を目的とした。

- (1) 保育者に特化したワーク・エンゲイジメントのモデルを構築する。
- (2) 保育者のワーク・エンゲイジメントを向上させる介入プログラムを開発し、評価する。

3. 研究の方法

(研究1)

保育者の感情労働に焦点をあてた調査研究を実施した。北陸地方の保育所、認定こども園、および、幼稚園で働く保育者 222 名を対象に、以下の A から E までの5つの要因とワークエンゲイジメントに関して調査をおこない、関連性について検討した：(A)勤務年数 (B)感情労働 (C)ネガティブな感情労働 (D)感情調節：再評価方略 (E)情調節：抑制方略。その結果、勤務年数が短く経験が浅いことが感情労働の頻度の多さにつながり、ワークエンゲイジメントを低下させる可能性が示唆された。

(研究2)

保育者間のコミュニケーションを促進する協働型の園内研修をこども園で実施することが保育者のワーク・エンゲイジメントに良い影響を与えることを検討する実践研究を実施した。具体的には、関東地方のこども園に勤務する保育者 18 名を対象に、協働型園内研修を計画し、3ヶ月間に3回の研修を実施した。研修の実施前後に、困り感の指標として職業性ストレス簡易調査表 57 項目を実施した。

その結果、研修の実施前と比べ、実施後にストレス反応が全体的により低下したことが示された。勤務時間の限られた多忙な保育の現場で協働型園内研修を工夫して実施することによって、職員が困り感を共有することができ、いきいきと働く意欲を増加させたことが示唆された。

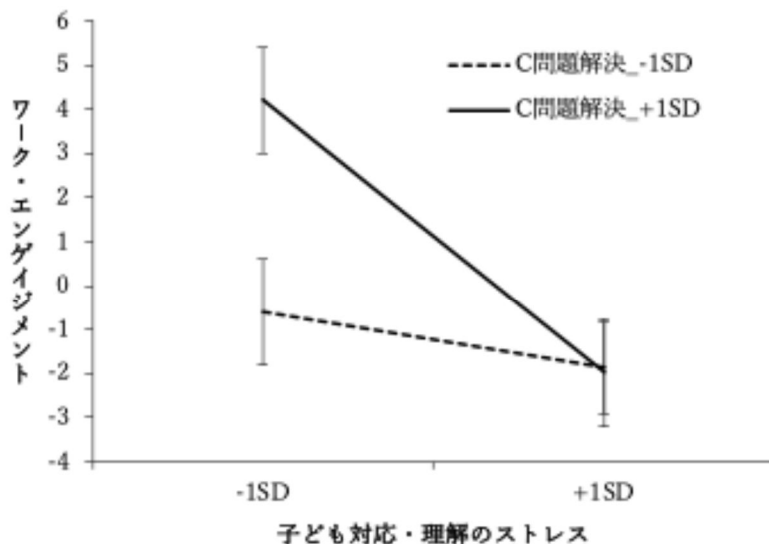
(研究3)

保育者が保育の現場で抱える主要なストレスを明らかにし、そのストレスに対してどのようなコーピング方略をとっているのか、また、そのコーピング方略がワーク・エンゲイジメントにどのような影響を与えているのか調査をおこなった。

調査対象者は北陸地方の保育所および認定こども園に勤務する保育者 270 名であった。質問紙は、年齢・合計勤務年数・勤務形態などを尋ねるフェイスシートと以下の3つの尺度から構成された。(1)保育士ストレス評定尺度(赤田,2010)(2)職務評価コーピング尺度(森本・嶋田,2010)(3)ユトレヒト・ワーク・エンゲイジメント尺度短縮版(Shimazu,et al.,2008)。

保育者の経験年数などの属性を統制して重回帰分析をおこなった結果、子ども対応・理解のストレス、給与待遇のストレス、および、諦めコーピングがワーク・エンゲイジメントと負の関連があることが示された。また、問題解決コーピングと子ども対応・理解のストレス、および、問

問題解決コーピングと保育所方針とのズレによるストレスとの交互作用項がそれぞれ有意であった。特に、問題解決コーピング得点の低い人では、子ども理解ストレスとワーク・エンゲイジメントとの関連はみられなかったが、問題解決コーピング得点の高い人では、子ども理解ストレスとワーク・エンゲイジメントとの間に有意な負の関連がみられた。子ども理解ストレスという職務ストレスを強く認知している保育者の場合、問題解決コーピングを用いてもワーク・エンゲイジメントは高くなり、保育者にとって問題解決コーピングが必ずしも適応的なコーピング・スタイルとはいえない可能性が示唆された。



(研究4)

保育者の省察の程度、雇用形態、ワーク・エンゲイジメント(WE)の関連について検討をおこなった。北陸地方のA市保育士会に所属する保育者345名(年齢:平均42.95歳, SD11.57, 範囲20-68)を対象にオンライン調査を実施した。調査内容は、年齢、役職の有無、勤務形態、勤務年数などを尋ねるフェイスシートと以下の5つの尺度から構成された。(1) WE: ユトレヒト・ワーク・エンゲイジメント尺度短縮版(Shimazu et. al., 2008)全9項目。7段階評定。(2) 個人の省察: 保育者の省察尺度(杉村ら, 2009)の「自己考慮」「自己注意」「子ども分析」「子ども察知」の4因子、計22項目を使用。5段階評定。(3) 他者との省察: 保育所での雑談の内容に関する尺度(岸本・藤, 2020)の「園児の姿や成長」因子6項目に今後の保育の展開に関する質問として4項目を追加し、計10項目を使用。7段階評定。(4) 保育者実践力: 保育者実践力尺度(上山・杉村, 2015)の「子ども理解に基づく関わり力」因子のうち、乳児に適用できない項目を3つ削除し、ひとつの項目について乳児に適用するため修正し、計5項目を使用。4段階評定。(5) 保護者支援力: 保護者支援力尺度(片山・高橋, 2021)の「保護者の養育力の向上に資する直接的支援」因子、計12項目を使用。7段階評定。

調査回答者のうち、短時間正規職員7名、短時間非正規職員41名、その他8名を除外し、フルタイムの正規職員219名を正規群として、および、フルタイムの非正規職員70名を非正規群として、本分析の対象とした。t検定の結果、他者との省察、および、WEにおいて群間に有意な差がみられた。また、雇用形態の違いによってWEと関連する要因に違いがあるのか検討するため、群ごとにWEを目的変数とする重回帰分析をおこなった。その結果、正規群では、経験年数、他者との省察、および、保護者支援力がWEと有意な正の関連があった。一方、非正規群では、いずれの要因においてもWEと有意な関連はみられなかった。本結果から、(1)非正規職員は正規職員と比べて他者と語りあう傾向がより強く、WEはより高かったこと、(2)正規職員においては職務経験年数が長く、他者と日々の保育実践を語り合う傾向が強く、保護者への支援をうまくおこなえていると感じている場合にWEが高くなるが、非正規職員にはそのような傾向は認められなかったことが示された。

4. 研究成果

日本の保育者の場合、雇用形態の違いによってWEの程度やその規定要因に違いが生じている可能性が考えられる。国立教育政策研究所(2021)によると、日本の常勤保育者は、持ち帰りや残業も含めた1週間の仕事時間は平均約50時間とOECD加盟国の中で最も長く、その原因として会議や園内研修、事務業務など子どもと接しない仕事時間が特に長いことが指摘されている。正規・非正規という保育者の雇用形態の違いが子どもと関わらない業務量の違いを反映しているのか、また、このことが保育者のWEにどのような影響を与えているのか、今後詳細な検討をおこなう必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 荒木友希子	4. 巻 23
2. 論文標題 保育者のワーク・エンゲイジメント	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 36-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒木友希子	4. 巻 34
2. 論文標題 保育者のワーク・エンゲイジメントと職務ストレスおよび特性的コーピング・スタイルとの関連	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 発達心理学研究	6. 最初と最後の頁 380-394
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11201/jjdp.34.0013	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 荒木友希子・町田大佳
2. 発表標題 保育者のワーク・エンゲイジメントと省察との関連
3. 学会等名 北陸心理学会第57回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Araki, Y.
2. 発表標題 Work engagement and emotion work among Japanese childcare workers.
3. 学会等名 The 32th International Congress of Psychology
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 荒木友希子
2. 発表標題 保育者のストレスおよびコーピング方略がワーク・エンゲイジメントに与える影響について
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 荒木友希子
2. 発表標題 保育者のワーク・エンゲイジメントに影響を与える要因の検討
3. 学会等名 日本教育心理学会第63回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 荒木友希子
2. 発表標題 保育者の感情労働がワーク・エンゲイジメントに与える影響
3. 学会等名 日本心理学会 第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 木友希子・仲野咲彩
2. 発表標題 保育者の勤務年数と感情労働がワーク・エンゲイジメントに与える影響
3. 学会等名 北陸心理学会 第53回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 荒木友希子・河西理恵子
2. 発表標題 協働型の園内研修が保育者のワーク・エンゲイジメントに与える検討 保育者がいきいきと働ける職場環境を作るために
3. 学会等名 第8回日本ポジティブサイコロジー医学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 荒木友希子・加藤奏
2. 発表標題 かわいい顔の赤ちゃんの泣き声は耳障りに感じない？
3. 学会等名 北陸心理学会第54回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 荒木友希子・町田大佳
2. 発表標題 保育士会としての実践研究の取り組みが保育者の心理的状态に与える影響
3. 学会等名 北陸心理学会第58回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 荒木友希子・町田大佳
2. 発表標題 仕事の要求度 資源モデルに基づいた保育者のワーク・エンゲイジメントに関連する諸要因の検証
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会第49回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 荒木友希子・町田大佳
2. 発表標題 保育者のワーク・エンゲイジメントと雇用形態との関連
3. 学会等名 日本心理学会第87回大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------